

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島 嶼 研 だ よ り

No.67

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2014年3月

 主な記事

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの退職にあたって (野田伸一)	p1
学生奮闘記「百聞は一見にしかず」 (島田温史)	p3
公開講座「環境変動に伴う島の生物と人の健康—現状と将来—」	p4
フィールドこぼれ話	
「良い教育がないと、良い実践家にはなれない、は甘え」 (森 隆子)	p9
連載 とうがらしに旅して 第八回 「すっぱがらい」 (山本宗立)	p10

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの退職にあたって

国際島嶼教育研究センター長 野田伸一

国際島嶼教育研究センターの前身である多島圏研究センターに赴任したのは1998年7月で、2014年3月の定年退職まで15年9ヶ月間、鹿児島大学には37年間勤務したことになります。多島圏研究センターに赴任した時は、南太平洋海域研究センターから改組されたばかりで、新たに総合研究プロジェクト「多島域における小島嶼の自律性」が企画されていました。学内の兼務教員50名あまりが参加するプロジェクトで、小島嶼が多数散在するアジア・太平洋地域について、小型の島嶼が不十分な人的・自然的資源の問題を克服し、多様な自然環境や社会文化的な特性を維持しながらその運営を行い得るかを探ろうとするものでした。私の最初のミクロネシア出張は1999年2月のヤップ島で、その年の秋に予定されていた水産学部の敬天丸を使用した総合学術調査の事前準備が目的でした。滞在中にヤップ島の伝統的踊りや習慣を守り続けるための祭であるヤップデイ

も開催され、全てが興味深いことばかりでした。水産学部の船を使用した調査は30名以上が参加し、1999年はヤップ本島、2001年はウリシー環礁で実施されました。水産学部の船を利用した調査は2001年が最後になりました。船を使う利点は航海中の現地での海洋観測、多量の資料の運搬ができることですが、それ以上に異なった分野の研究者が居を一にすることによる研究テーマの発掘は有益なものでした。

国際島嶼教育研究センターの活動でも、多くの学部や学内共同教育研究施設の兼務教員が参加し、島嶼地域に関する学際的な研究が立案・実施されています。研究の詳細については述べませんが、“国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況(平成24年度)”および“国立大学法人鹿児島大学の平成24年度に係る業務の実績に関する評価結果”で「国際島嶼教育研究センターでは、ミクロネシア連邦コスラエ州でのデング熱の流行に際し、世界保健

(2) 島嶼研だより No. 67

機関（WHO）および同州政府に、蚊の分布調査結果を提供するとともに、対策への助言を行っている」との高い評価を受けました。国際島嶼教育研究センターには多彩な人材がそろっており、今後も特色ある研究と国際交流が展開されることを確信しています。今後もこれらも活動に協力をお願い致します。

国際島嶼教育研究センターは共通教育に関して「南太平洋多島域」の他に、2005年から与論島で集中講義「島のしくみ」を開講しております。集中講義では与論町における行政、文化、観光、農業、漁業の現在と今後について、与論島の経験豊かな実務者の講義と現場の視察を行っています。また、2010年からは大学院全学横断的プログラム「島嶼学教育コース」が開講され、運営の中心的役割を果たしています。本教育コースでは島嶼に関する様々な分野の授

業科目を履修することにより島嶼地域の様々な要請に応え、国際島嶼社会でも活躍できる人材の育成を目指しています。国際島嶼教育研究センターの教員はコア科目「島嶼学概論Ⅰ・Ⅱ」とオープン科目「太平洋島嶼学特論」を担当しています。「島嶼学概論Ⅰ・Ⅱ」では講義の一部を三島村の硫黄島と十島村の中之島に出かけて実施し、「太平洋島嶼学特論」はグアム大学とミクロネシア連邦のチューク州で実施しています。また、他のオープン科目は国際島嶼教育研究センターの兼務教員が担当しています。特別教育コースの「島嶼学教育コース」と「環境学教育コース」の科目内容の検討が行われており、共通科目の設定や内容の充実、さらに将来的には研究科横断の副専攻に進展することを期待しています。



デング熱媒介蚊の駆除対策を実施しているピンガラップ島にて

学生奮闘記

百聞は一見にしかず

島田温史（鹿児島大学大学院農学研究科）

私は熱帯果樹であるパッションフルーツを材料とし、環境の変化に対する植物体の反応を研究している。しかし、主産地である熱帯地域を訪れたことがないため、熱帯果樹の現地の栽培環境を見たことがなく、また本来の味を知らない。いつかは現地に行って見て味わいたいと常々思っていた。そのような中、島嶼学教育コースのオープン科目である太平洋島嶼学特論を受講し、熱帯地域であるミクロネシアに行く機会を得た。

ミクロネシアに着いてホテルへ向かうとき、外を眺めると至る所でパンノキやココヤシ、バナナ、パパイヤ、マンゴーなど多くの熱帯果樹を見ることができた。ミクロネシアのバナナは日本でよく食べられるフィリピンバナナとは異なり、少し酸味のあるものが多かった。ココヤシの果実は緑色であるとテレビを見て思い込んでいたが、現地には茶色や黄色など色の異なる系統も栽培・利用されていた。照りつける太陽の下で飲んだココナッツジュースは、最高の自然の恵みだった。ミクロネシア地域における主食の1つであるパンノキは、葉の切れ込みや果形の異なる様々な品種が存在し、食べてみると栗とサツマイモの間のような味と食感であった。ミクロネシアのカンキツ類は鹿児島の特産であるタンカンやポンカンなどと異なり、果皮の色が緑色で酸味の強いものが多かった。現地ではナイミスと呼ばれ、香辛料として使用されていた。カンキツ類を毎回の食事で使用するという習慣が私にはなかったので正直驚いたが、現地の料理に合い、さっぱりとしてとても美味しかった。

ピス島という小さな島にも訪れた。そこでは、電気、ガス、水道がなく雨水や井戸水を利用して生活をしていた。2日間過ごしたが、普段あるものがない生活は大変不便だと感じた。しかし、南国特有のゆっくりとした時間の流れや島の人達の温かさに心が癒され、2日間を楽しく過ごすことができた。

今回現地を訪れたことによって百聞は一見にしかずということわざの意味を痛感した。普段日本にいてだけでは絶対に見ることが出来ない現地の様子を観察出来たことで、私の研究や今後の人生にとって大変実りのあるものになった。機会があればまた訪れたいと思う。



図1 ミクロネシアの果樹



図2 ピス島の島民との記念撮影

公開講座

「環境変動に伴う島の生物と人の健康—現状と将来—」

平成 25 年 12 月 14 日（土）に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター主催で鹿児島大学市民公開講座『環境変動に伴う島の生物と人の健康—現状と将来—』が開催されました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。

趣旨

生物や人の暮らしと病気は環境の変動に応じて、ダイナミックに変化してきた。環境変動を受けやすい島は、その影響を考える上で格好のモデルといえる。

本市民公開講座では、環境変動に伴う植物、動物、寄生虫、人の暮らしと病気の現状を鹿児島県離島フィールドで実際に調査を行っているそれぞれの専門家に整理してもらい、どのような原因でどのような変化が起こっているか、また、その変化に伴う問題について明らかにする。これらを踏まえた上で、今後の課題と対応についてシンポジウム形式で検討する。環境変動の影響を受けやすく、その結果が目に見えやすい形で現れる島での事例をモデルとして検討することにより、環境変動に伴い、すでに日本全体で起きている、また、将来に起きる可能性のある事象に対し示唆に富む情報を提供したい。



寺田仁志先生

1) 人の活動の変化がもたらした島嶼の植生変化—里地・里山は今—

寺田仁志
(鹿児島県立博物館)

日本の人口は縄文時代早期に推計で2万人だったが、現在は1億3000万人まで膨れている。しかし、昭和30年代から産業構造の変化、都市への人口流出等のため、島嶼部を含む遠隔地では過疎化が進んだ。里山の資源に頼ってきた主要産業の農林業が衰退し、産業形態を変えたため、自然環境の基本となる植生は変化してきた。すなわち里山のうち原野は植生遷移がすすんで消失し、薪山は自然林に近い二次林となり、竹山は暴走拡大してしまった。また、農業の効率的経営のため、起伏のあった耕作地周辺は平準化されて畦を失い、すき間環境にいた生きものは棲みにくくなっている。さらに、河辺は埋め立てられ湿地が減少し、海岸部は海岸侵食によってえぐられ海岸植生は変化している。

2) 気候変動と鹿児島県の動物事象—ヤクシカとマングースから見る積雪寒冷イベントの発生頻度とその機能について—

塩谷克典
(鹿児島県環境技術協会)

外来種である鹿児島市喜入地区のフィリマングース個体群については、2009年に増加傾向が顕在化して、地域の生態系保全を危うくすると危惧されたが、鹿児島県の捕獲事業により個体数は極小化された可能性が高いものと考えられる。極小化の過程を検証すると、予想以上に増加率が高くならなかったことが示唆された。喜入地区の個体群が、低い増加率で留まっていた要因については、1) 競争種の存在、2) 天敵の存在、3) 人工林を含めた植生構造、4)



塩谷克典先生

鹿児島地溝による地形、5) 餌生物の四季を通しての生産の低さなどが考えられるが、それらに加え、無霜地帯に訪れる寒冷イベント(=「低温で雪の多い冬」)が影響した可能性がある。これらは全て、同じく外来個体群が広がった奄美大島や沖縄本島には存在しない環境要因である。

屋久島に生息するヤクシカについては、現在、現地の植生や希少植物への影響が危惧されるほど増加している状況にある。鹿児島県により特定計画が設定され、屋久島町・地元猟友会、林野庁等の努力により捕獲が進められると同時に、環境省、鹿児島県により密度の変化についてのモニタリングが行われている。密度パターンの解析では、温暖な地域の多い本県において、数十年間隔で到来する寒冷イベントのヤクシカへの直接的な影響については依然として未解明な部分が多い。近年になってなぜ、ヤクシカの個体群が極端な植生への影響を引き起こすほど増加し、なぜ、過去にそれが生じていなかったかということについて検証すべきである。

以上の事例を元に、外来種も含めた様々な生物の侵入、定着、増加において、気候変動影響に加え、過去と異なる狩猟圧や地域に特有の環境構造の変化なども加わり、これまでと異なる変化に留意する必要性について述べる。

3) 温暖化が問題になる前の寄生虫病の状況

野田伸一

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

地球温暖化に伴ってマラリアなどの熱帯病が日本でも発生することが危惧されている。主な理由は、温暖化に伴ってマラリアを媒介する蚊の発生する個体数が増加し、発生範囲も広がることである。1934年～1938年の全国のマラリア患者数を見ると、鹿児島県は北海道よりも患者数が少なく、患者発生が多いのは福井県や滋賀県であった。日本でマラリア患者が減少した経過と理由について考察する。鹿児島県で流行していたフィラリア症の経過についても考察する。



野田伸一先生

4) 生活環境に伴い習慣が変わり、病気が変わる

嶽崎俊郎

(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

鹿児島県のあまみ島嶼地域は長寿者の割合が多い地域である。一方、同地域における平均寿命は必ずしも長くなく、最近10年間の死亡率を年齢群ごとに比較してみると、40～64歳の中年男性の死亡率は日本人平均の1.5倍もある。一方、65歳以上の女性高齢者の死亡率は日本人平均の約0.9倍と低い値を示している。ここ20年の変化をみても、中年男性では上昇している。



嶽崎俊郎先生

なぜ、あまみ島嶼地域で中年男性の死亡率がこんなに高くなったのだろうか。答えは生活環境の変化にあると考えられる。交通の発達に伴い、本土から食材が容易に入りようになり、食生活が豊かになると同時に、高カロリー・高脂肪食に接する機会が増えた。道路の整備や農業の機械化に伴い、便利になると同時に運動量も減った。

私達が平成 17 年から開始している「あまみ

の生活習慣病予防と長寿に関する研究」結果によると、あまみ地域における肥満者の割合は日本人平均の 2 倍になっている。また、健診受診者においては、血液中のコレステロール値が高い人の割合が急増している。

島は環境変動の影響を受けやすい特徴がある。環境とともに人の生活も急激に変化してきている今、病気ではなく、健康に結びつける変化が求められていると言える。



質疑応答

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 141 回 2013 年 9 月 30 日
太平洋芸術祭の収録現場から

小出 光
(太平洋民族芸能ライブラリー)

1972 年フィジーで第 1 回南太平洋芸術祭が行われてから 40 年目の昨年はソロモン諸島で第 11 回が開催された。実はこのイベントは 1985 年の第 4 回から「南」の文字が削除され名称変更されたが、小出はこのときから毎回映像の収録に携わっている。

芸術祭との関わり方は立場によって異なるだろうが、取材者として接したときには所謂公式記録には残されない類の問題に直面し、事前にあるいは現場で対処しなければならないケ

ースも屢々である。今回はそのような事柄にも言及しながら、各回の内容や運営の特徴について概観してみたい。時間の節約のためレジュメを用意し、その分映像で現場の雰囲気を見取っただけのよう図りたい。

第 142 回 2013 年 10 月 21 日
日本先史時代の栽培植物とその起源

—最近の古民族植物学の研究成果から—

小畑弘己
(熊本大学文学部)

穀物に関しては、日本は東アジアの大陸部に起源をもつイネや雑穀の伝播地の一つである。

現在、考古学で一般的に許容されている農耕社会の成立は、弥生時代早期に朝鮮半島から伝来した水稲耕作を契機としたものである。しかし、先行する縄文時代に栽培植物が存在したことは、古くから考古学以外にも農学や地理学などの研究者によって提唱されていた。佐々木高明に代表される「照葉樹林文化論」がそれである。我が国の基層文化の形成において、縄文時代に東南アジア内陸部および南中国南部から伝わった芋類と雑穀を軸とする焼畑農耕が重要な役割を果たしたという説である。稲作を中心に据えない農耕を行って地域と時代は古くから存在しており、佐々木らの説はこの点で正鵠を射ているが、引用されている栽培植物に関しては、考古学的に完全に立証されたものが含まれている。これは考古学界自体が栽培植物に関する誤同定や汚染資料を見抜けなかったことに由来の原因があるが、他分野においては、横断的な学問成果の引用のため、それらが無批判に受け入れられ、拍車をかけている。

このような中、2000年代以降の古民族植物学的研究、とくに縄文時代の栽培植物に関する研究は、圧痕法やAMSによる炭素年代測定法の開発、種子や花粉の同定法の発展などに伴い、大きな進歩を遂げてきた。その中でも特質すべきは、圧痕法によって、これまで弥生時代に中国大陸から伝播してきたと考えられていたアズキやダイズが縄文人たちによって栽培が開始されたことが明らかになったことである。

今回は、圧痕法で明らかになった成果を中心に、縄文時代の栽培植物とその起源について紹介する。

第143回 2013年11月25日
中生代以降の九州から南西諸島の脊椎動物化石

仲谷英夫
(鹿児島大学理学部)

九州・南西諸島で最古の脊椎化石は1894年に報告された長崎県の古第三紀哺乳類の足痕化石である。その後、120年近くの間には哺乳類だけでなく、恐竜をはじめとする爬虫類や鳥類などの化石が多数発見され、その時代は中生代の白亜紀から新生代の第四紀にわたっている。

本地域で最も古い脊椎動物化石は福岡県の前期白亜紀(約1億3000万年前)の肉食恐竜化石である。中生代白亜紀から新生代新第三紀の前半までの本地域はアジア大陸の一部やその沿岸にあり、大陸と共通性の高い恐竜や哺乳類の化石がほとんどである。その後、新第三紀の中期中新世(約1500万年前)になると、日本列島がアジア大陸から分離し、島嶼独自の進化がおり、また、氷河期による海水準変動によりアジア大陸とつながるなどの過程を経て、現在の脊椎動物相が成立した。

第144回 2013年12月9日
太平洋島嶼域における気候変動、災害、危機の伝達

エヴァンジェリア・パポウサキ
(ニュージーランドユニテック工科大学)

太平洋島嶼域は過去数年にわたって気候変動に関する論争に関心が集まった。すでにその小規模な経済、文化、脆弱な自然環境が気候変動の影響を受けた島もある。このため、より強力な情報伝達のメカニズムを確立し、様々なメディアと情報伝達の土台を導入する必要性に関心が高まった。それは、災害前の早期警戒システムと災害対応時の情報伝達にアクセスできるようにするためだ。この地域のメディアと情報伝達環境の複雑性が新しい技術の到来によって増大するにつれて、緊急事態と災害時のICT(情報と伝達技術)の活用の妥当性についての疑問が残る。さらにICTの統合可能性を理解する必要性も高まっている。例えば、携帯電話をラジオのような災害対応技術のためのメディアと情報伝達計画に統合することである。

本発表は 2013 年の太平洋メディア支援スキーム国家 (PACMAS State) のメディアとコミュニケーション報告に基づく。これは 14 の太平洋島嶼国と RMIT 大学 (オーストラリア)、ゴロカ大学 (パプアニューギニア)、UNITEC (ニュージーランド) の間の協力関係により実施されたものである。本発表は、研究の重要な構成要素 (メディア政策、システム、能力開発と内容) を通して、気候変動、緊急時と危機の情報伝達システムのいくつかの側面に焦点を当てる。また、これらの島嶼国にとって不可欠な情報伝達システムの開発と維持の緊急性を強調するいくつかの重要な研究成果について紹介する。

本研究は「コミュニケーション・エコロジー」と「開発のためのコミュニケーション」(C4D) の原理に基づいて行われた。これは、コミュニティ・ラジオ、情報と情報伝達技術 (ICT) 構想、伝統的なマスメディア、そしてコミュニティ対話のような過程を含むすべての情報伝達形態と様式を網羅する。

ある藩士の流罪—八丈島を事例に—

佐藤宏之
(鹿児島大学教育学部)

延宝 7 年 (1679) 正月、越後高田藩において家老小栗美作と反美作派の永見大蔵の対立に藩主松平光長の継嗣問題が絡んで紛争が激化 (いわゆる越後騒動)。この騒動は幕府重職間の対立も絡んで長期化したが、延宝 9 年 6 月、5 代将軍徳川綱吉の親裁により小栗父子の切腹、永見以下の遠島・配流、松平光長の改易など一連の処罰が決定する。

本報告で扱う「ある藩士」とは越後騒動の主役のひとりである永見大蔵のことである。永見は綱吉の親裁によって八丈島に遠島を申し付けられる。

本報告では遠島にかかる、幕府・藩・預け人を取り巻く環境や相互の関係性に迫り、遠島が意味するものを考えてみたい。

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.34, No.2, 2014

Research Papers

HIDAYAT H. and YAMAMOTO S.: Papua's Threatened Forests: Conflict of Interest Government versus Local Indigenous People

GIRSANG W.: Socio-Economic Factors That Have Influenced the Decline of Sago Consumption in Small Islands: A Case in Rural Maluku, Indonesia

Review

NODA S.: Mosquito Fauna in the Federated States of Micronesia: A Discussion of the Vector Species of the Dengue Virus

～フィールドこぼれ話～

「良い教育がないと、良い実践家にはなれない、は甘え」

森 隆子（医学部保健学科）

「良い教育がないと、良い実践家にはなれない、は甘え」—そう気づかされた、ミクロネシア連邦チューク州でのフィールドワークであった。今もなお、胸に残る原風景がある。小さなボート舟に乗って小さな島に向かう道中、眼下一面に広がった“海と空がまるで融合したような”景色である。蘇る記憶と共に、前述の言葉の意味を少し再考したい。

今回の旅程は、中心地ウエノ島を中心に、小島であるロマノム島、トノアス島を1週間巡るものであった。ホームステイや他の先生方への同行、あるいは短期大学をはじめとした施設や自宅訪問を経験させていただきながら、幾度となく自身へ投げかけた問いかけがあった—“もし私がこの小さな島で生まれ育ったとしたら？”

私は看護職の道を志し、鹿児島大学で看護学を学んだ。現在は、地域を育む看護実践モデルのデザインをテーマに研究に取り組んでいる。専ら日本を対象地としてフィールドワークを行っている。また教員として、特に地域看護の実践者である「保健師」の養成教育に携わっている。地域看護学は、地域を育て、社会を変革できる学問であると信じている。自らの力で価値を創造できる人材こそ、地域を切り拓くリーダーとなる。与えられた環境の中で、どう生き抜くか。ミクロネシアで得られた様々な出会いを通して、「真に学ぶ」「自らを育む生き方」とは何かを、自問している。必ずしも、用意された環境や経験が人を育てるとは限らない。

今改めてふり返り、様々な資料を紐解いている。果たして、この国で、自国出身者、特に小さな島の出身者である彼らは、どのような夢や希望を抱き、またどのようにして困難に立ち向かい実現への道を歩むのだろうか。そして、その先にどのような世界が広がるのだろうか。この軌跡の一端を辿るテーマへ取組み、今後報告としてまとめていきたい。



ロマノム島へ向かう道

「とうがらしに旅する」

第八回 「すっぱがらい」

初めての海外調査地はタイだった。言葉も調査方法もわからず右往左往。でもとりあえずお腹は減る。知っているタイ語は焼飯「カオパット」。ふらっと食堂に入り、適当な声調でカオパットを頼む。ぼんやりと机の上を見ていると、唐辛子の輪切りが透明な液体に浮かんでいる。なんだ？小皿にとって嘗めてみる。すっぱっ！からっ！唐辛子は酢に浸かっていたのだ。これが「すっぱがらい」との出会いだった。以降あちこちで「すっぱがらい」調味料と出会うことになる。奄美大島では唐辛子をサトウキビの酢に漬けた調味料がお土産として売られていた。刺身を食べる時、醤油に少し垂らすと風味がグンとよくなった。昔は漁師がこの調味料を持って漁に出掛けることもあったと聞く。ミクロネシア連邦ではココヤシの酢に唐辛子を漬けていた。チューク環礁ではこの調味料をマナキニと呼ぶ。白米に即席ラーメンをぶっかけ、そこにマナキニを注ぐともう相性抜群。日本で早く販売してくれないかな、絶対爆発的に売れるのに。フィリピンでも様々な酢に唐辛子を漬けて調味料とするし、時には柑橘の果汁に唐辛子を漬けていた。カンボジアではなんと水に唐辛子と蟻を入れた調味料を利用して。そりゃ蟻は確かに酸っぱいけれど、やり過ぎではないかい？しかし嘗めてみる、いや正確にはもぐもぐしてみると、蟻の酸味もなかなか捨てたもんじゃない。よくよく考えてみると、ちょっと前に流行った酸辣湯は同じ原理のスープだ。中国四千年の歴史おそるべし。なぜ「酸っぱい」と「辛い」が合わさるとこんなにおいしいのでしょうか？本当に不思議。人生の辛酸は嘗めたくないが、おいしい「すっぱがらい」はたくさん食べよう飲もう味わおう。（山本宗立）

編集後記

野田伸一センター長が三月で退職されます。私が赴任して丸四年。毎年八月はミクロネシアで約一カ月間野田先生と同じ部屋で寝食を共にしました。出張が多い私は、妻よりも野田先生と寝ていることが多いのではないかと思います。共通教育の授業「島のしくみ」では、片道二〇時間かけて船で与論島へ一緒にいきました。船の寝床はスペースが小さく、体の大きい野田先生には窮屈そうでした。今後はワインを片手に研究会等へ参加していただければ幸いです。短い間でしたが本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。（山本宗立）



ピンゲラップ島からポンペイ島へ帰る
軽飛行機の中にて（2013年8月）

島嶼研だより No. 67 平成 26 年 3 月 14 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>